

中学校選択への親の関与と子どもの生活の実態

—子ども・保護者の中学校選択に関する意識と行動調査（2007年）から—

○子安 潤（愛知教育大学）

○橋本尚美（ベネッセ教育研究開発センター）

1. 問題の所在

早期からの能力主義的選別・複線化や、市場原理を基本とした新自由主義教育政策が強まるなか、公立中高一貫校の設置や、学校選択制の導入、教育特区など、さまざまな学校選択に関わる制度が導入されてきた。

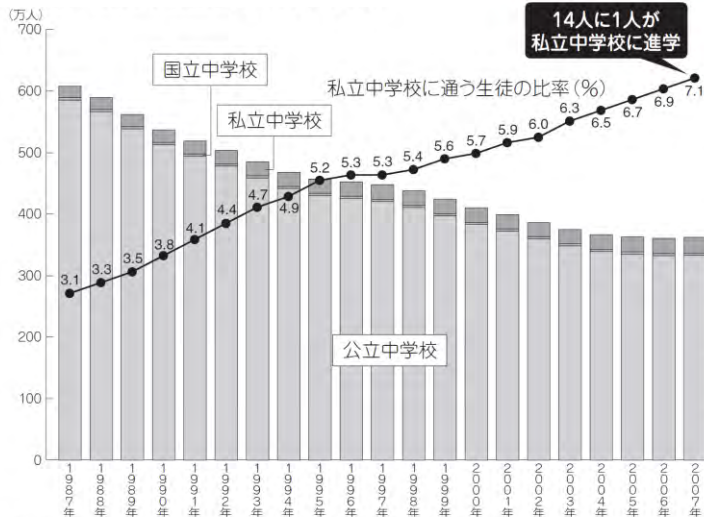
これらは特に、中学校進学段階における学校選択を多様化させており、小学校における子どもの生活や関係性、学びのあり方に影響を与えているものと考えられる。

そこで本報告は、ベネッセ教育研究開発センターが2007年12月に実施した「中学校選択に関する調査」のデータをもとに、その実態と、それらを生み出す構造を検討し、子どもの関係性や学びのあり方についての課題を提示するものである。

(1) 中学校選択の20年間の変化

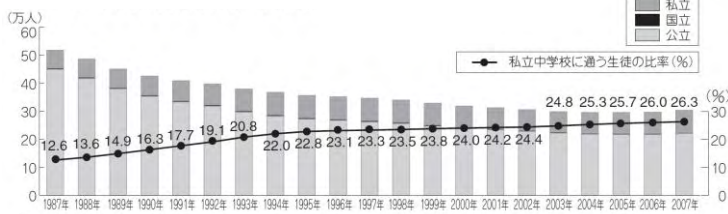
1) 私立中学校の受験と進学

図1-1 私立・国立中学校生徒割合の推移(全国)



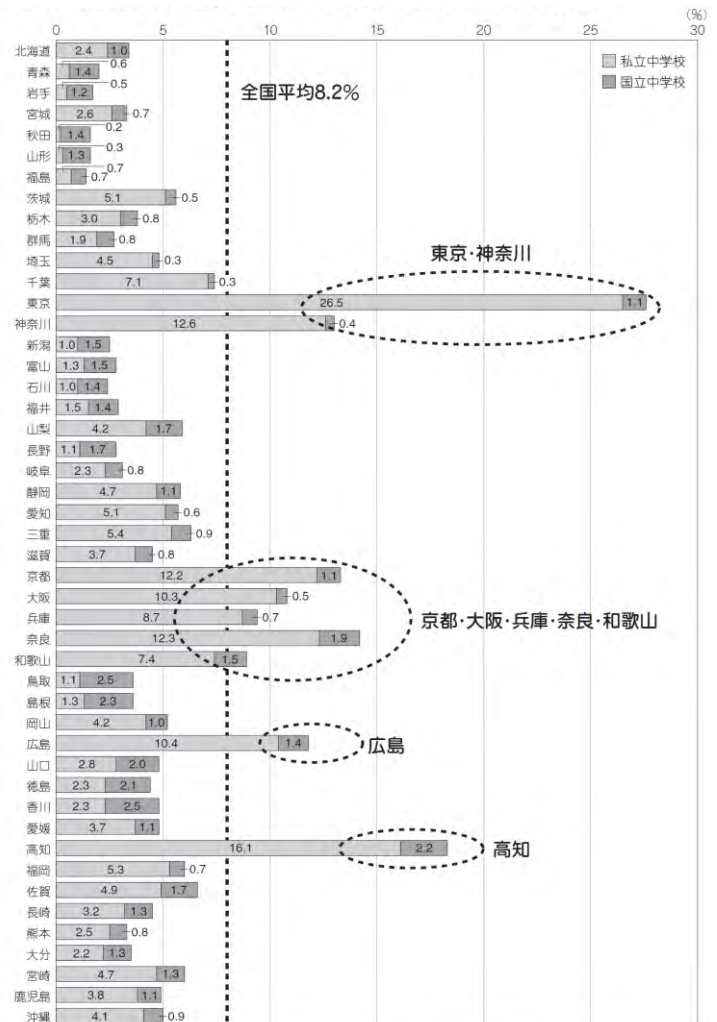
注 「学校基本調査」(文部科学省)より算出(1999年以降は中等教育学校前期課程含む)。

図1-2 中学校の生徒数の推移(東京都)



注1 文部科学省「学校基本調査」より作成。
注2 生徒数は在学者であり、近隣県などからの流入は考慮されていない。

図1-3 私立・国立中学校に通う生徒(1年生)の比率(都道府県別、2007年度)



注 数値は、「学校基本調査」(文部科学省)より、私立中学校在学者と国立中学校在学者をそれぞれ1年生総数(中等教育学校前期課程含む)で割って算出した。

文部科学省「学校基本調査」をもとに、公立・国立・私立中学校に通う生徒の比率の推移をみると、中学校選択をめぐる状況は、ここ20年間で大きく変化している。私立に通う生徒の比率は、1987年には、全国平均3.1%、東京都は12.6%であったが、2007年には、全国平均7.1%、東京都26.3%といずれも2倍以上になっている(図1-1~2)。東京都では、現在4人に1人が私立中学校に通っている状況である(図1-3)。

2) 公立中高一貫校の受検と進学

新たに加わったものとして公立中高一貫校の受検がある。公立中高一貫校に通う生徒の比率は、2007年に全国平均1.3%、東京都1.4%と、私立に比べてまだ少ないものの、2007年4月現在、43都道府県に149校の公立中高一貫校が設置されている(図1-4、表1-1)。そのうち72校が受検を必要とするが、例えば東京都内では平均受検倍率が10倍を超えており、東京都内の小学6年生の約1割が受検している計算になる(東京都の公立中高一貫校の2008年度募集定員1,010名、東京都の全児童数約9,500人)。

図1-4 中高一貫校設置状況の推移(全国)

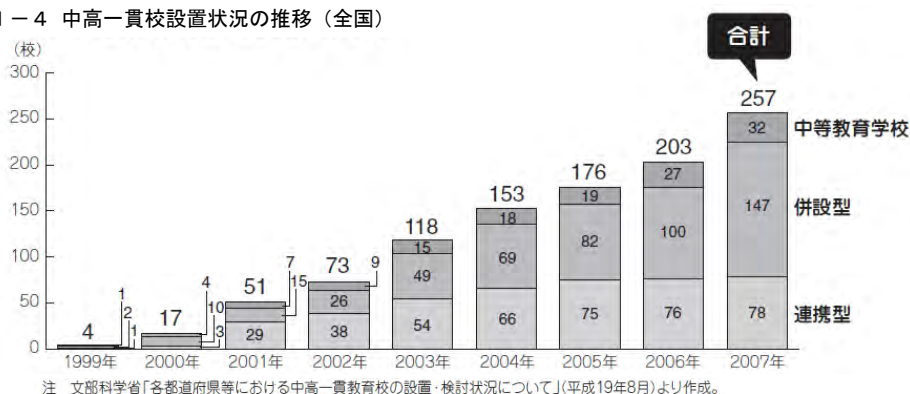


表1-1 2007年度の設置状況の内訳(校)

	国立	公立	私立	合計
中等教育学校	3	17	12	32
併設型	1	55	91	147
連携型	0	77	1	78
合計	4	149	104	257

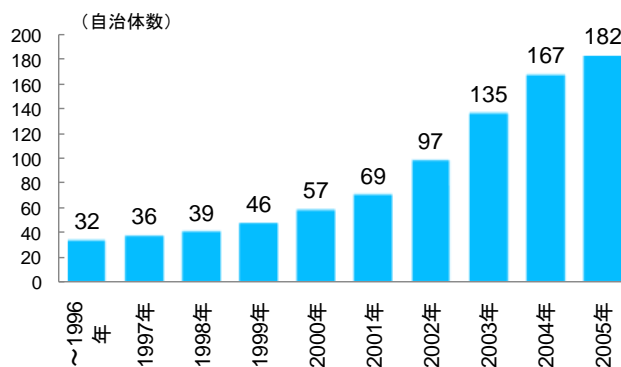
3) 学校選択制

また、学校選択制が導入されているところでは、公立中学校に進学する場合でも学校選択の機会がある。

2006年度までに中学校で学校選択制を導入しているのは185自治体であり、全国の2校以上の中学校を置く自治体の13.9%にあたる(図1-5)。

このような中学校選択をめぐる環境変化のもと、どのような学校選択行動が行われ、何をもたらしているのかを検討する。

図1-5 学校選択制の導入開始時期(中学校、累計)



注: 図は中学校入学時の学校選択制の導入時期を示している。
文部科学省『小・中学校における学校選択制等の実施状況について』(2005年)より導入時期が不明な自治体が3自治体ある。

2. 調査概要

(1) アンケート調査

1. 調査テーマ 小学6年生とその保護者の中学校選択に関する意識と行動の実態調査
2. 調査方法 郵送法による自記式質問紙調査
3. 調査時期 2007年12月

4. 調査対象 全国の公立小学校に通う6年生とその保護者
 [小学6年生] 1,501名(女子768名、男子718名、無回答・不明15名)
 [保護者] 1,504名(母親1,402名、父親89名、その他9名、無回答・不明4名)

※調査対象者は、全国の公立小学校6年生のリストに基づいて無作為に抽出。
 小学6年生用の調査票と保護者用の調査票をあわせて郵送し、回収した。

5. 調査項目 [小学6年生]
 生活時間/学習時間/習い事/学校外の学習機会/学習塾の利用/中学受験について/希望する進学段階/学校観・職業観・価値観/学校生活/成績の自己評価/得意・苦手なこと/通いたい中学校/心や身体の疲れ/親と話す内容/親との関係など
 [保護者]
 子どもへのかかわり/家庭の教育方針・悩み/子どもの将来像/習い事/学校外の学習機会/学習塾の利用/教育費/教育についての情報源/中学校選択について/中学受験について/希望する進学段階/小学校や先生への満足度・要望/子どもを通わせたい中学校/教育観・社会観など

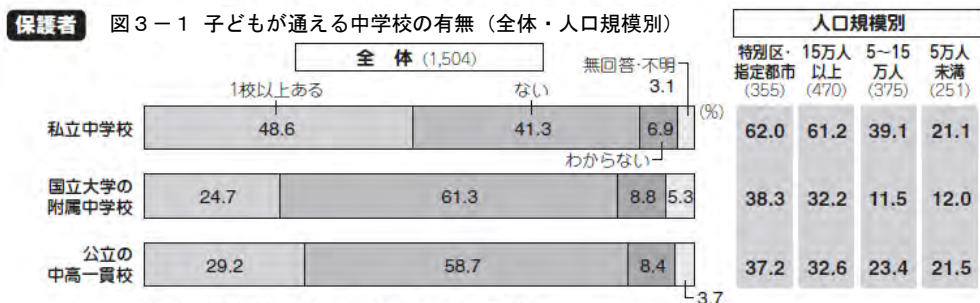
(2) インタビュー調査

1. 調査時期 2008年6月
 2. 調査対象 中学1年生の子どもを持つ母親
 [子どもが在学している中学校]
 ①首都圏の私立中学校・国立中学校(難関) 5名
 ②首都圏の私立中学校・国立中学校(難関以外) 5名
 ③首都圏の公立中高一貫校 3名
 ④岡山県の私立中学校・国立中学校・公立中高一貫校 4名
 ⑤広島県の私立中学校・国立中学校・公立中高一貫校 5名

3. 中学校進学段階での学校選択の拡大と多様化

(1) 受験(受検)校と学校選択制の有無

この調査では、子どもが通える範囲に「私立中学校」が「1校以上ある」と回答した保護者は約半数、「公立中高一貫校」は約3割であった。公立中高一貫校は私立に比べ、まだ多くの人を受検できる状況にはない。しかし、人口規模別にみると、「私立中学校」が「1校以上ある」と回答した割合は、地域差が大きいのに対し、「公立の中高一貫校」は、私立に比べると地域差が小さい(図3-1)。



注1 「1校以上ある」は「1~2校」「3~4校」「5校以上」の合計。
 注2 人口規模別の数値は「1校以上ある」の%。
 注3 ()内はサンプル数。

「特別区・指定都市」……特別区(東京23区)および2008年3月現在の政令指定都市17市(札幌市、仙台市、さいたま市、千葉市、川崎市、横浜市、新潟市、静岡市、浜松市、名古屋市、京都市、大阪市、堺市、神戸市、広島市、北九州市、福岡市)
 「15万人以上」……………特別区・指定都市を除いた人口15万人以上の市町村
 「5~15万人」……………人口5万人以上15万人未満の市町村
 「5万人未満」……………人口5万人未満の市町村

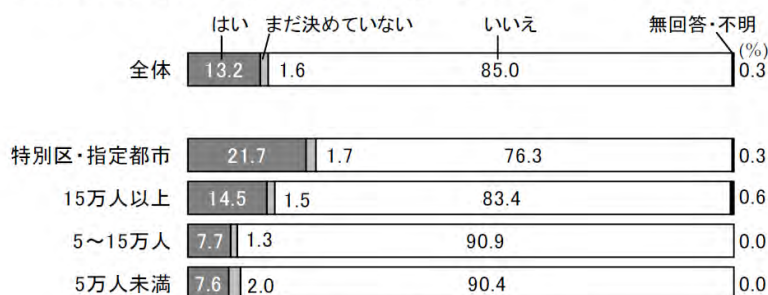
(2) 中学受験（受験）予定の有無と第一志望校

この調査では、中学受験を予定している保護者は 13.2%であった。そのうち、「私立中学校」の第一志望者は約6割と多いが、「公立の中高一貫校」も、受験予定者の約4人に1人にあたる 23.7%が第一志望にしている。また人口規模別にみると、「5万人未満」の地域では、受験予定の比率はまだ8%程度と低いですが、そのうち「公立の中高一貫校」の第一志望者は約半数にのぼる（図3-2～3）。公立中高一貫校の受験はどの地域でも選択され始めており、これまで受験を考えてこなかった層も、受験・受検を考え始めている可能性がある。

なお、子どもの性別による受験予定比率の差はみられなかった（女子 13.3%、男子 13.1%）。ただし、第一志望校は、女子は私立 51.3%、公立中高一貫校 29.6%に対し、男子は私立 59.8%、公立中高一貫校 19.6%と、女子のほうが公立中高一貫校の比率が高かった。

図3-2 中学受験をさせる予定（全体・人口規模別）

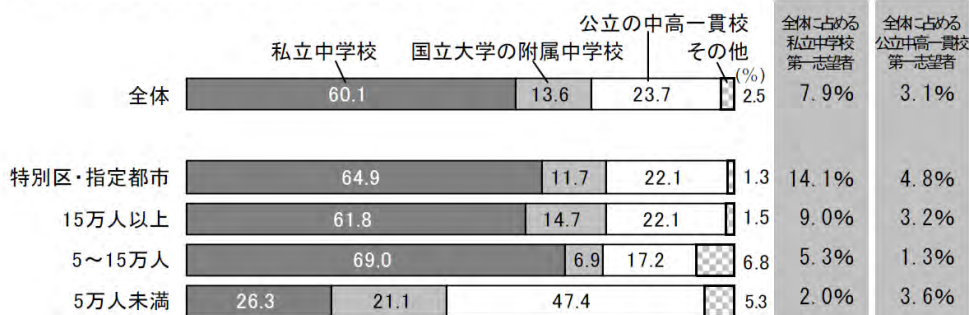
Q【保護者】お子様に、中学受験をさせる予定ですか。



注：中学受験には、公立中高一貫校の受検も含めている。

図3-3 受験の第一志望校（全体・人口規模別）

Q【受験させる保護者】第一志望の学校は、どのような中学校ですか。



注：「その他」は、「わからない」「まだ決めていない」「無回答・不明」の合計。

(3) 学校選択制の導入状況と利用

居住する自治体に学校選択制が「導入されている」と認識している保護者は 24.4%（図3-4）、そのうち半数が、どの公立中学校に進学させるかを「考えた」と回答している（図3-5）。

図3-4 学校選択制の導入に対する認識（全体・人口規模別）

Q【保護者】お住まいの地域では、公立中学校の「学校選択制」が導入されていますか。

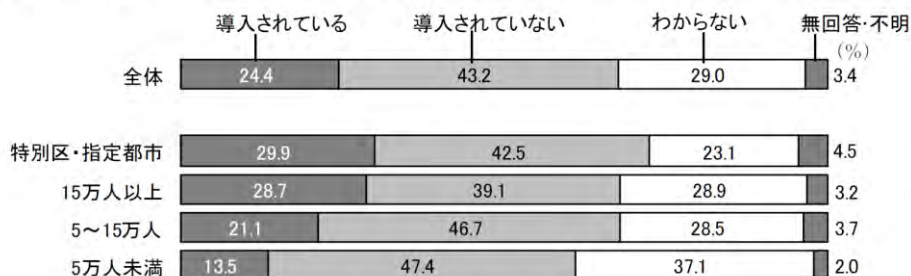
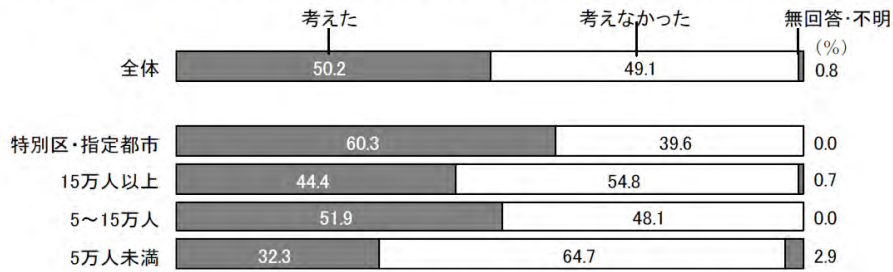


図3-5 学校選択制の利用について（全体・人口規模別）

Q【学校選択制が「導入されている」と回答した保護者】どの公立中学校に進学させるか考えましたか。

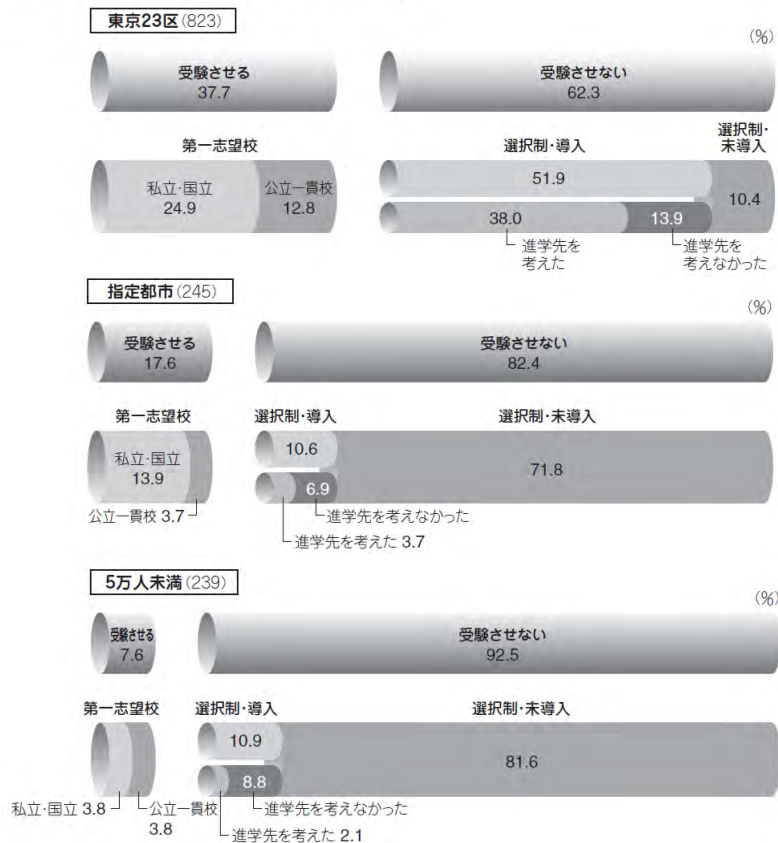


注：「考えた」は、「よく考えた」「まあ考えた」の合計、「考えなかった」は「あまり考えなかった」「まったく考えなかった」の合計を示す。

(4) 中学校選択状況の違い（東京23区、指定都市、人口5万人未満の市町村）

地域差はあるが、指定の公立中学校以外に中学校の選択肢が存在する者は増加していると考えられる。地域の公立中学校への進学のほか、私立や国立の中学校の受験、公立中高一貫校の受検、学校選択制による学校選択と、中学校進学段階での進路選択は多様化している。特に、東京23区では、中学校進学段階で、学校選択をしない者が特別と思えるほどの状況があり、親と子は、「地元の公立中学校に進学する」ということも含め、進学について考えざるを得ない状況が生まれていると思われる（図3-6）。

保護者 図3-6 中学校選択の状況（人口規模別）



注1 受験させるかどうか（「あなたはお子様に、中学受験をさせる予定ですか」）は、「まだ決めていない」、無回答・不明を除外して数値を算出した。
 注2 受験させる保護者の第一志望校（「第一志望の学校は、どのような中学校ですか」）については、「その他」「わからない」「まだ決めていない」と無回答・不明を除外して数値を算出した。「私立中学校」「国立大学の附属中学校」と回答した人を「私立・国立」、
 「公立の中高一貫校」と回答した人を「公立一貫校」としている。
 注3 学校選択制の導入（「あなたがお住まいの地域では、公立中学校の「学校選択制」が導入されていますか」）については無回答・不明を除外して数値を算出し、「導入されている」を「選択制・導入」、「導入されていない」「わからない」を「選択制・未導入」として示した。
 注4 学校選択制の検討状況（「お子様をどの公立中学校に進学させるか考えましたか」）については無回答・不明を除外して数値を算出し、「よく考えた」「まあ考えた」を「進学先を考えた」、「あまり考えなかった」「まったく考えなかった」を「進学先を考えなかった」として示した。
 注5 ()内はサンプル数。

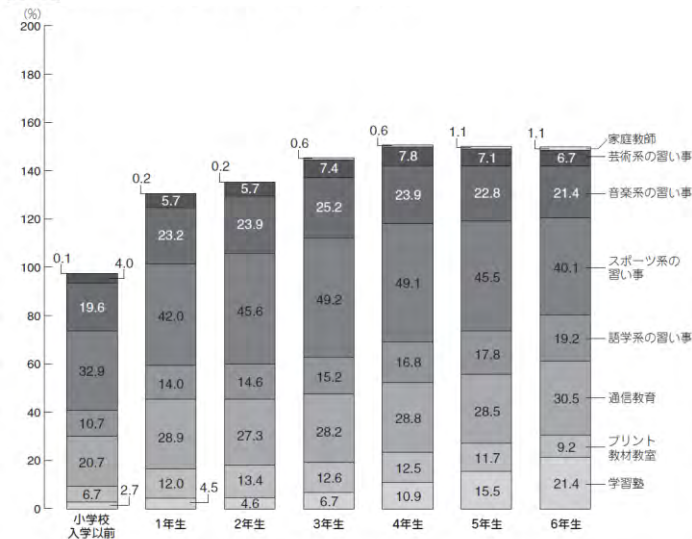
4. 子どもの生活と意識・行動の分化

どのような中学校選択をするかが、子どもの経験、生活、意識などに影響を及ぼしていると思われる。また、もともとそういう成長環境にある者が、受験（受検）に向かうとも考えられる（詳細は6. で示す）。それにより、学校生活や授業において、子どもどうしのずれ違いが生じている可能性がある。

(1) 習い事・学習塾の経験（希望進学先別）

受験しない子ども（公立中学校進学予定者）も多くの習い事に通っているが、とりわけ、私立中学校を第一志望にしている子どもは、小学校3年生までに多くの習い事に通い、そのうえで、4年生頃から学習塾へと生活をシフトさせている（図4-1～2）。

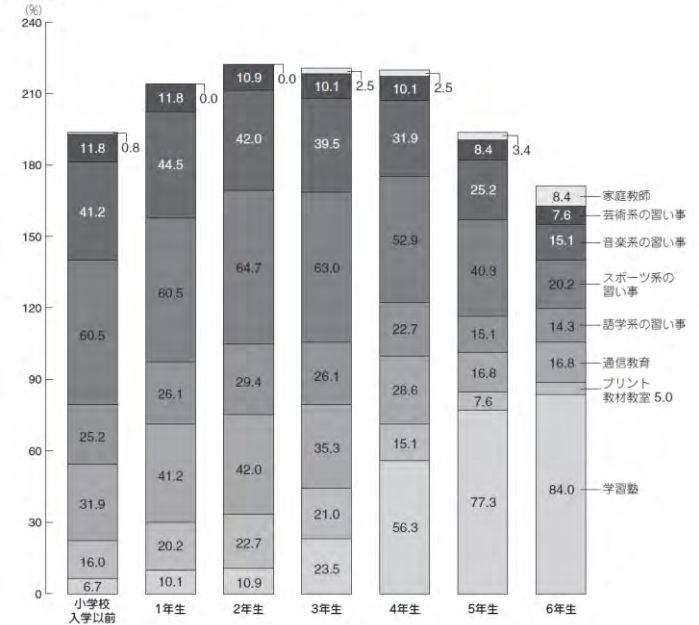
保護者 図4-1 習い事の経験率（公立中学校進学予定者）



注1 複数回答。
 注2 それぞれ学年で該当の習い事をしてきたかをたずねた。複数の習い事をしてきたケースがあるため、合計が100%を超える。
 注3 「あなたはお子様は、中学受験をさせる予定ですか」の質問に対して、「いいえ」と回答した保護者を「公立中学校進学予定者」としている。
 注4 サンプル数は1,278名。

注1 「公立中学校進学予定」は、「あなたは今、どこかの中学校を受験しようと思っていますか」の質問に、「いいえ」と回答した子ども。
 「私立中学校第一志望」は、同じ質問に「はい」と回答した子どものうち、保護者に対する「第一志望の学校は、どのような中学校ですか」の質問に「私立中学校」と回答した人。「公立中高一貫校第一志望」は、同じ質問に「公立の中高一貫校」と回答した人。以下同。

保護者 図4-2 習い事の経験率（私立中学校第一志望者）



注1 複数回答。
 注2 それぞれ学年で該当の習い事をしてきたかをたずねた。複数の習い事をしてきたケースがあるため、合計が100%を超える。
 注3 「あなたはお子様は、中学受験をさせる予定ですか」の質問に対して、「はい」と回答し、かつ第一志望校を「私立中学校」にしている保護者を「私立中学校第一志望者」としている。
 注4 サンプル数は119名。

(2) 生活時間（希望進学先別・性別）

受験しない子ども（公立中学校進学予定者）は、「友だちと遊ぶ」時間や「テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ」時間などが受験する子どもに比べて長く、生活にゆとりがある。「学校外の学習」の時間は、受験する子どもの平均（177.2分）と比べると半分以下である。

一方、受験する子どもは、「学校外の学習」の時間が長く、それ以外の時間を削って生活している。公立中高一貫校を第一志望にしている子どもは、「家族と話をする」時間などを確保しつつ、比較的緩やかに受験準備をしているようだが、私立中学校を第一志望にしている子どもは、1日約3時間半を「学校外の学習」の時間にあて、友だちと遊ぶ時間や睡眠時間などを削って生活している（表4-1）

性別にみると、「学校外の学習」にはあまり性差がないが、それ以外の時間の使い方は異なっている。ただし、受験（受検）するかどうかが大きく影響しており、受験する男子は、「学校外の学習」に多くの時間を使っているのに対し、受験しない男子は、それ以外のことに時間を使っている。男子のあいだの差は女子のあいだの差よりも大きい（表4-2）。

子ども

表4-1 生活時間（平均時間、全体・希望進学先別）

(分)

	学校外の学習	習い事	友だちと遊ぶ	テレビを見る	テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ	本を読む(マンガ以外)	パソコンを使う	家族と話をする	睡眠
全体 (1,501)	89.1	35.0	64.6	119.6	39.2	23.3	22.1	71.8	504.6
公立中学校進学予定 (1,241)	75.4	36.6	69.3	124.5	42.2	22.4	22.2	71.7	508.3
公立中高一貫校第一志望 (44)	118.0	35.1	55.1	111.8	21.6	28.0	27.2	84.4	502.5
私立中学校第一志望 (116)	208.7	18.2	23.4	75.9	16.2	26.8	12.7	61.3	469.3

注4 濃いアミカケは全体平均より10分以上長いことを、薄いアミカケは全体平均より10分以上短いことを示す。

子ども

表4-2 生活時間（平均時間、全体・性別・受験予定別）

(分)

	学校外の学習	習い事	友だちと遊ぶ	テレビを見る	テレビゲームや携帯ゲーム機で遊ぶ	本を読む(マンガ以外)	パソコンを使う	家族と話をする	睡眠
全体 (1,501)	89.1	35.0	64.6	119.6	39.2	23.3	22.1	71.8	504.6
女子 (768)	91.5	29.1	56.6	127.3	26.4	29.1	24.2	83.4	497.6
男子 (718)	86.9	41.7	72.6	110.7	52.3	17.1	19.2	59.7	512.2
女子(受験しない) (642)	80.4	29.6	60.1	132.2	27.8	28.3	24.3	84.5	500.1
女子(受験する) (102)	163.5	25.8	31.2	93.7	18.4	32.4	22.4	73.8	477.9
男子(受験しない) (587)	70.2	44.5	78.8	115.5	57.1	16.0	19.2	58.4	517.3
男子(受験する) (100)	192.1	23.2	35.9	79.6	22.9	23.3	17.1	62.1	480.3

注1 「学校外の学習」の平均は、「あなたはふだん(学校がある日)、学校以外で、1日にどれくらい勉強しますか」の質問への回答により算出。学校の宿題の時間や学習塾で勉強する時間を含む。
 注2 「習い事」の平均は、習い事に「行っている」と回答した子どもについては、1回あたりの時間(「1日にどれくらいの時間やっていますか」)に1週間に通う回数(「1週間に何回くらい行っていますか」)をかけて算出。「行っていない」と回答した子どもは0分として合計し、7日で割って子ども全体の1日あたりの平均時間を算出した。
 注3 「睡眠」の平均は、就寝時刻(「あなたはふだん(学校がある日)、何時ごろに寝ますか」)から、起床時刻(「あなたはふだん(学校がある日)、何時ごろに起きますか」)までの時間を計算したもの。起床時刻または就寝時刻が無回答・不明の場合は分析から除いている。
 注4 「習い事」「睡眠」の平均以外は、「ほとんどしない」を0分、「4時間より多い」を270分のように置き換えて、無回答・不明を除いて算出した。
 注5 アミカケは、性別および受験予定別ごとの性別で10分以上差があることを示す。
 注6 ()内はサンプル数。

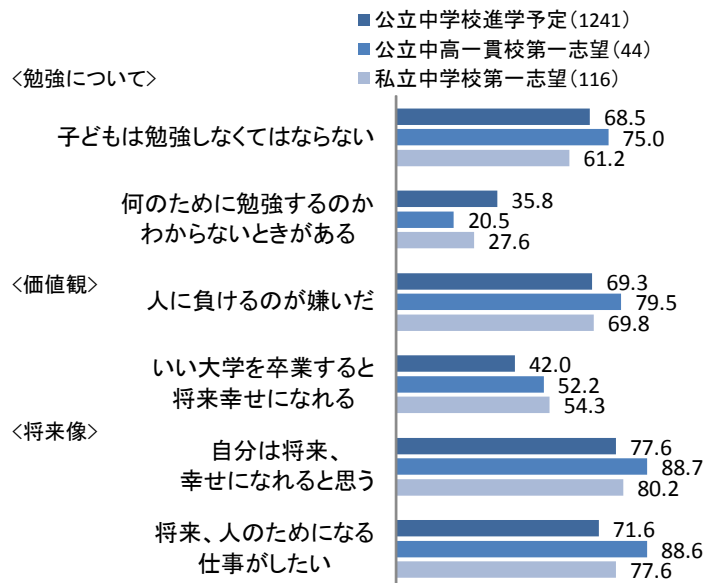
(3) 子どもの価値観（希望進学先別・性別）

公立中高一貫校を第一志望にしている子どもは、「自分は将来、幸せになれると思う」「将来、人のためになる仕事がしたい」が9割弱、「人に負けるのが嫌いだ」が約8割、「子どもは勉強しなくてはならない」が7.5割と、まじめで、負けず嫌いな面や、将来に希望を持っている様子が見えらる。

これに対し、私立中学校を第一志望にしている子どもは、「子どもは勉強しなくてはならない」が低く、「何のために勉強するのかわからないときがある」は公立中高一貫校志望者に比べると高く、やや勉強に意味を感じられていない面がありそう(図4-3)。

図4-3

勉強についての価値観(子ども・希望進学先別)



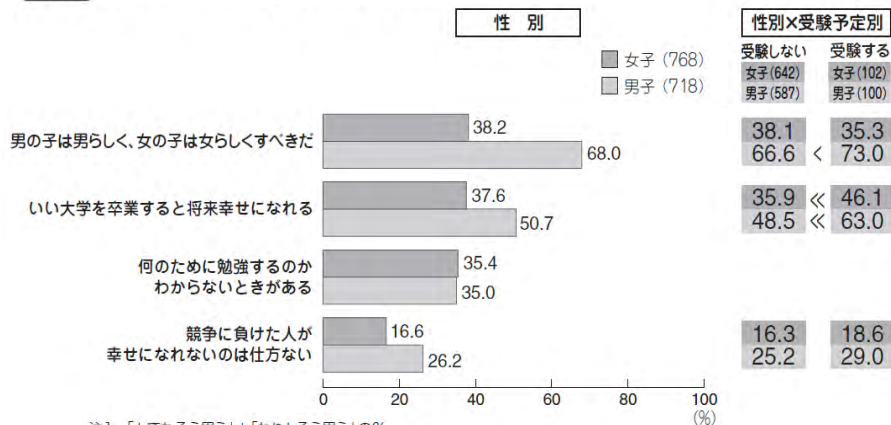
注1 15項目中、希望進学先別で10ポイント以上差があった6項目を示している。

注2 「とてもそう思う」+「わりとそう思う」の%

注3 ()内はサンプル数。

また性別にみると、価値観には共通するものが多いが、性差がみられた3項目では開きが大きく、男子は女子に比べ、男らしさ、学歴や競争への志向が強い。また、これらは、受験する男子のほうがより強い。これらの志向の強い者が受験をし、また受験に向かうなかでその意識が高められているのではないかと考えられる（図4-4）。

子ども 図4-4 価値観（性別・受験予定別）

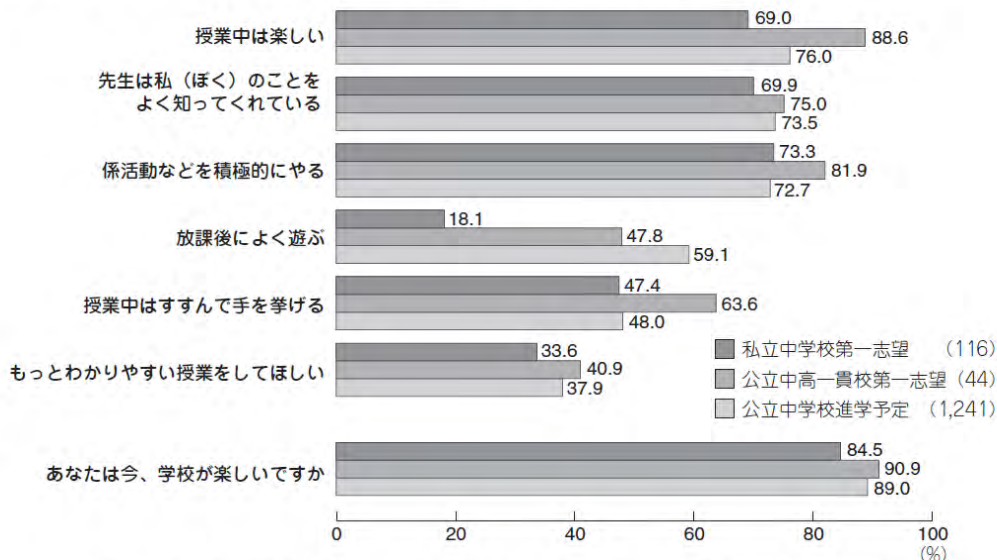


注1 「とてもそう思う」+「わりとそう思う」の%。
 注2 性別で5ポイント以上差があった3項目のみ、受験予定別の数値も示している。
 注3 <<>>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。
 注4 ()内はサンプル数。

(4) 学校での様子や学校について思うこと（希望進学先別）

学校での様子を見ると、公立中高一貫校を第一志望にしている子どもの積極的な様子に対し、私立中学校を第一志望にしている子どもは、やや授業などを楽しんでいない様子がみられる（図4-5）。

子ども 図4-5 学校での様子や学校について思うこと（希望進学先別）



注1 「とてもそう」+「わりとそう」の%。ただし、「あなたは今、学校が楽しいですか」については、「とても楽しい」+「わりと楽しい」の%。
 注2 9項目中、私立中学校第一志望者と公立中高一貫校第一志望者で5ポイント以上差があった6項目と「あなたは今、学校が楽しいですか」を示している。
 注3 ()内はサンプル数。

5. 学びの貧困化について

(1) 今回の調査結果は、「学びの貧困化」という事態が進んでいることを示した。今回の調査だけでこれを断定することはできないので、別の調査等の資料を追加してそのことを示したい。

学びの貧困化とは、子どもの学習活動それ自体の貧困を指す。また、貧困な学びを助長している塾や学校教育の授業構成を指す。したがって、学校的成績の高い層にも低い層にもあてはまる概念として用いる。また、貧困「化」と経年的表現を用いるが、それがいつを起点としたどの程度の変化であるかを今回の調査で断定的に判断することはできない。だが、中学受験の広がり、後掲資料を見る限りでは、現行学習指導要領の全面实施と共に始まった学力低下言説の隆盛時期から学びの貧困化へと舵は切られたと推定される。

今後も一定の中学受験は続くが、学びの貧困も続くと考えられる。こうした事態は、「習得学習」「活用学習」「探求学習」などという動向を確実に屈折させていく可能性がある。また、ものごとについて問題意識を持って学ぶことや、学びを通じて社会に参加していくことや、自然と交わっていく学びとの乖離をもたらす。

こうした現実が社会的に何をもたらすのか慎重な考察が必要となるが、少なくとも、こうした学習をしている子どもたちの存在を踏まえて、学びを回復させる方向こそが授業研究の基本方向となると言えよう。

(2) 中学受験をした子どもの保護者インタビューから (2008.06.21 実施)

A：私立中高一貫の男子校に合格

- ・小学4年から塾に通った。週2回の3時間ずつ。小学6年になると、週3日になって、後半は毎日になった。だんだん増やした。
- ・塾の日は1日3時間塾でやって、帰ってから勉強した。かなり本気になってからは、塾に学校が終わってすぐに行って、8時ぐらいに帰ってきて、ご飯を食べて、お風呂に入って、11時ぐらいまでは勉強していたと思う。4、5時間ぐらい。日曜日は全く勉強できなかったの、その分をやらなきゃいけないので、夏過ぎからは、4、5時間勉強していた。

B：公立中高一貫校に合格

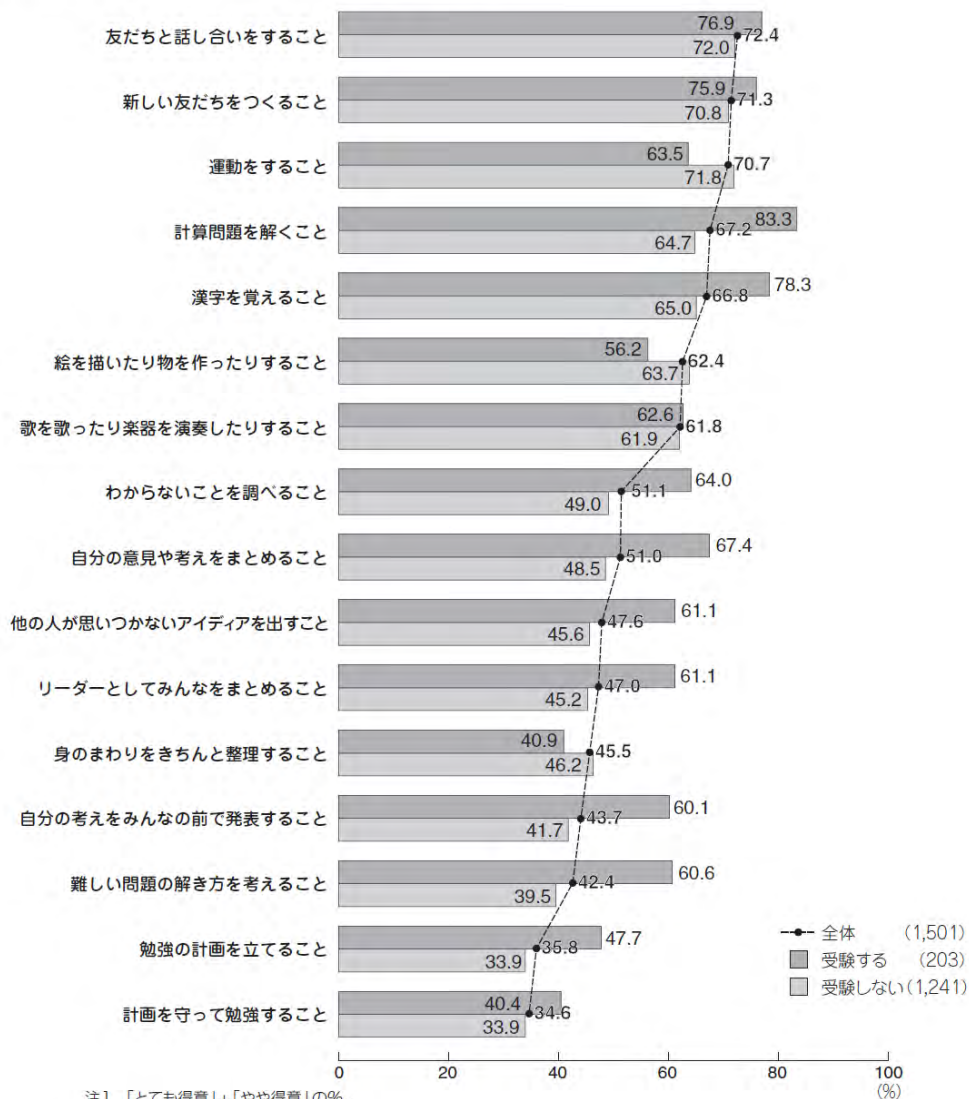
- ・6年生になった頃から、夫が熱心になってきた。その頃は作文を頑張ったほうが良いということで、ネットで、作文のお題を検索して。こんなのを書いてみたら良いとか、ニュース、本を持ってきては、読んでおいた方が良いのではないかと、色々本を買ってきたが、なかなか難しくやっていない。

C：私立中高一貫の女子校に合格

- ・5年の終わりのときに、クラス分けテストで失敗して、クラス落ちしてしまった。1年生の時から、クラス分けで落ちたことがなかった。顔つきが変わって来た。やった時点で、失敗したというのがわかったようだ。宿題やって、通っていれば、上のクラスにずっといれると思っていたが、その時初めて落ちて、そこから、本人が真剣になった。スイッチが切り替わった。成績が思わしくなければ、やめても良いと思っていたが、子どもの顔つきが変わったので、落ちてからやめたら、これでは負け犬になるから、やめるにしてもクラスが上がってからやめなさいと言った。

(3) 子どもの得意と苦手

子ども 図5-1 得意なこと（全体・受験予定別）



注1 「とても得意」+「やや得意」の%。

注2 ()内はサンプル数。

受験する子どもは、運動や絵画と整理が非受験の子より苦手だが、それ以外は得意なことが多い。とりわけ計算問題、漢字を得意とする。また、「難しい問題」を解くことも得意とする(図5-1)。だが、それは、徹底したドリルと解法スキルの結果である。

その実情は、石原千秋『中学入試国語のルール』(講談社)の解法スキル解説を見るとよくわかる。

(4) 教員の授業時間の使い方 (ベネッセ教育研究開発センター「第4回学習指導基本調査」より)

図5-2 心がけている授業時間の使い方・進め方の変化 (小学校教員/経年比較)

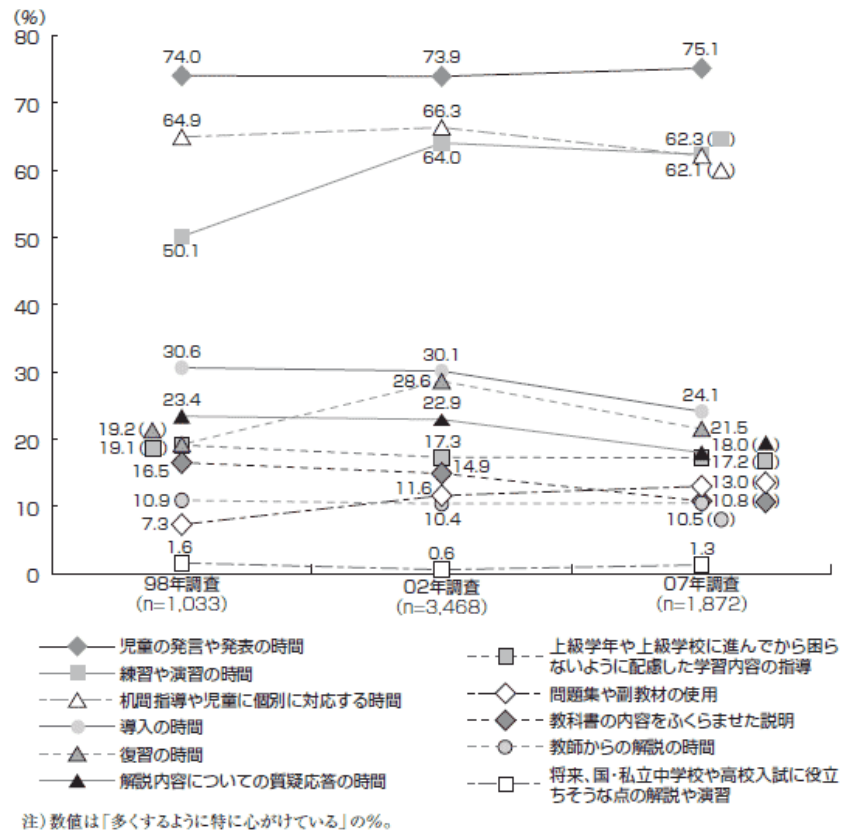
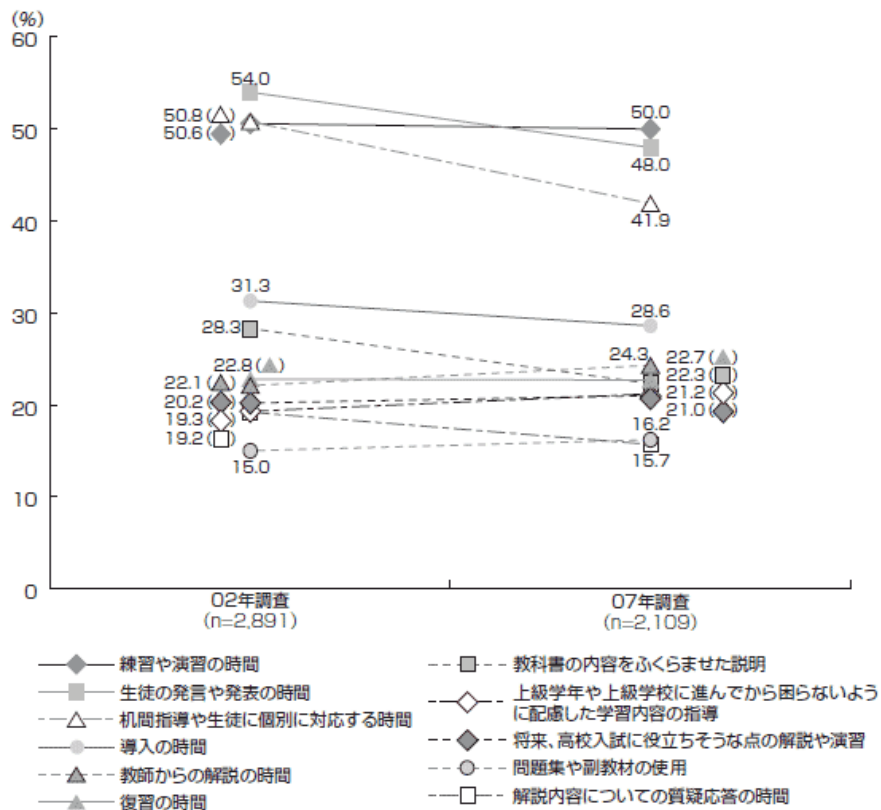


図5-3 心がけている授業時間の使い方・進め方の変化 (中学校教員/経年比較)



6. 保護者の社会的階層と子どもへの関与

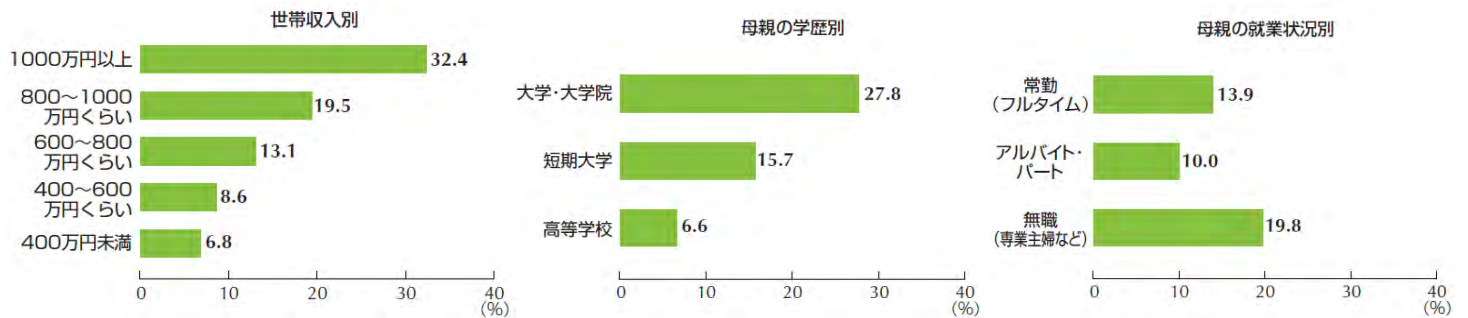
このような実態を生み出す構造の一端に、保護者の社会的階層や、子どもへの関与の強さがあると思われる。

(1) 保護者の社会的階層と中学受験

1) 中学受験（受検）予定の比率（属性別）

中学受験（受検）予定の比率は、世帯収入が高い層、保護者が高学歴の層、母親が専業主婦の層などで高い（図6-1）。

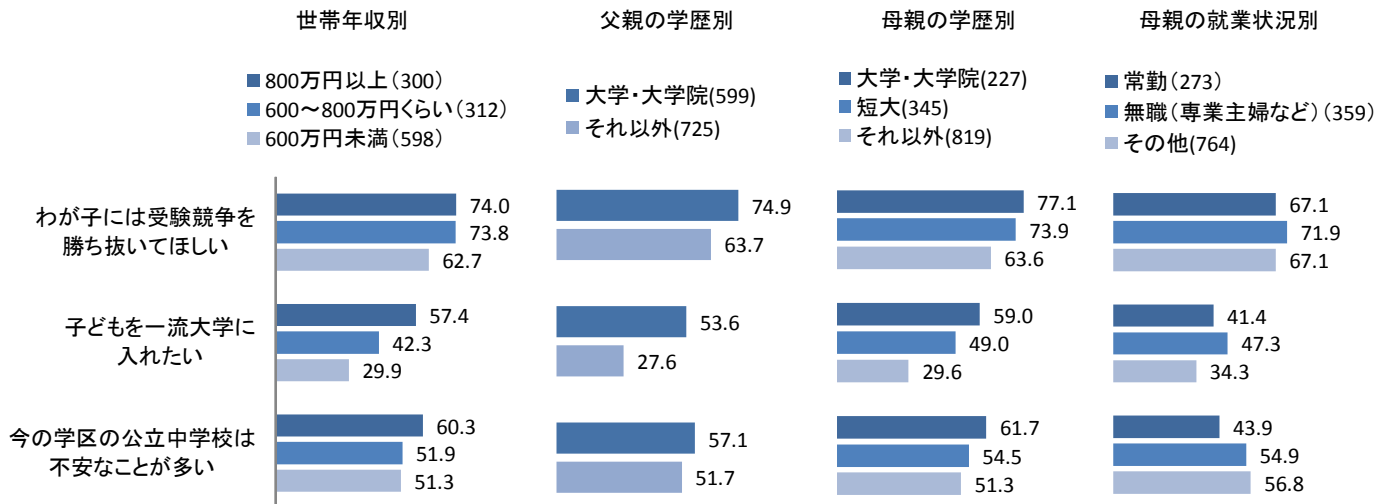
図6-1 中学受験（受検）予定の比率（属性別）



2) 保護者の教育観（属性別）

競争意識や公立中学校への不安にも属性による差がみられ、世帯収入が高い層、保護者が高学歴の層、母親が専業主婦の層などで高い（図6-2）。

図6-2 教育観（属性別）



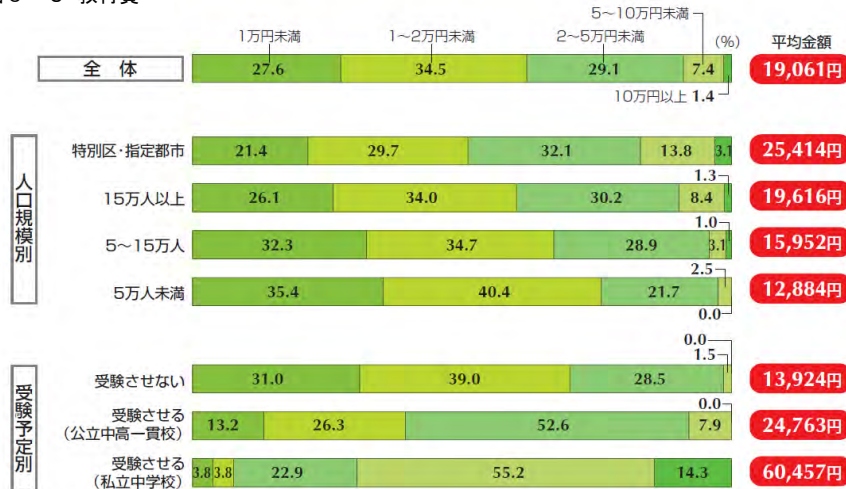
注1 「とてもそう思う」+「わりとそう思う」の%
注2 ()内はサンプル数。

3) 教育費（全体・人口規模別・受験予定別）

特に私立中学校の受験は、教育費をかけて行われている。世帯収入が高い層、保護者が高学歴の層は、子どもの教育費をかけることができる層でもある。

ただし、公立中高一貫校の受験は、現在のところ、私立中学校の受験に比べると教育費をかけずに行われている。そのため、参入へのハードルが低いともいえる（図6-3）。

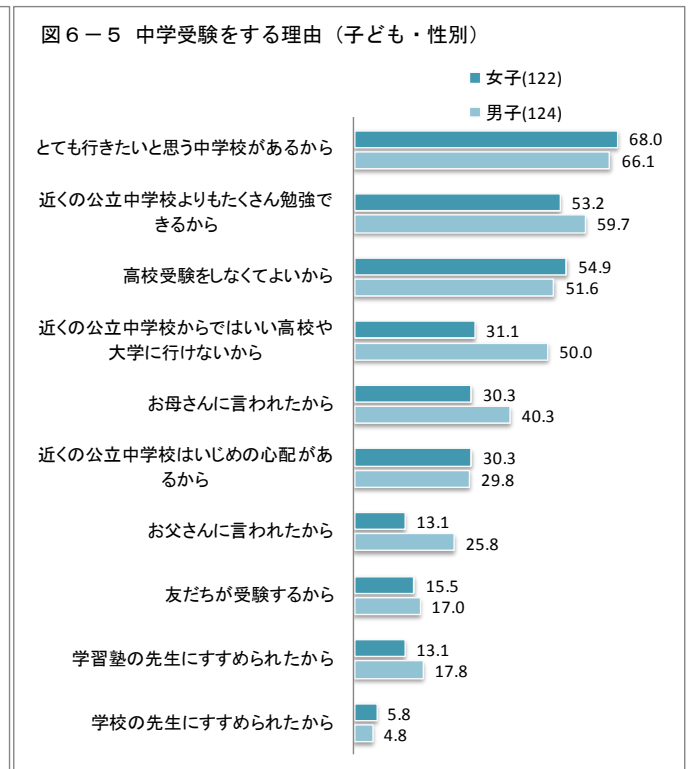
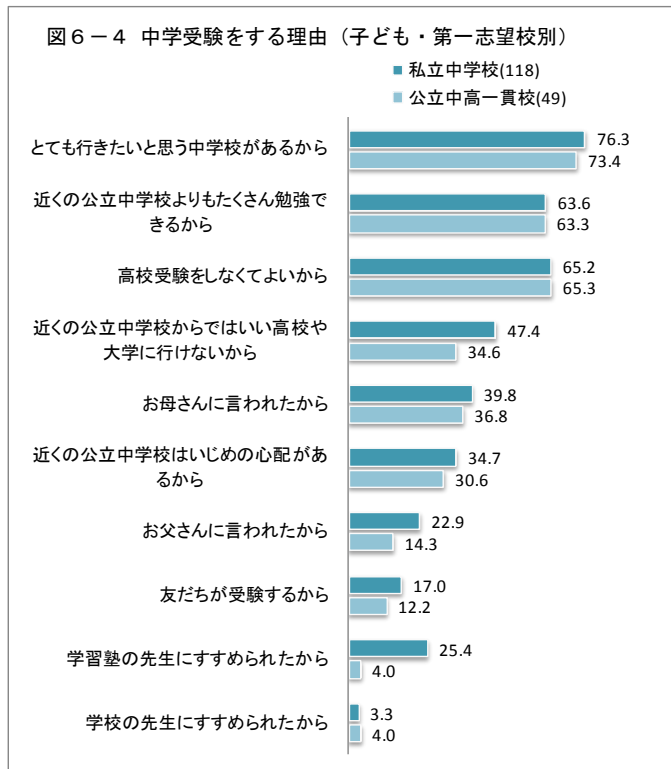
図6-3 教育費



注1 教育費は、小学校でかかる費用は除き、学用品などは含め、千円単位で回答してもらった。数値は無回答・不明を除いて算出した。
 注2 「公立中高一貫校」は「第一志望の学校は、どのような中学校ですか」の質問に「公立の中高一貫校」と回答した人。「私立中学校」は同じ質問に「私立中学校」と回答した人。

(2) 保護者の子どもへの関与

1) 子どもが中学受験（受験）をする理由（第一志望校別・性別）



注1 「とてもそう思う」+「わりとそう思う」の%。

注2 () 内はサンプル数。

性別にみると、男女とも、「とても行きたいと思う中学校があるから」を第1位にあげているが、さらに、男子は「近くの公立中学校よりもたくさん勉強できるから」「近くの公立中学校からではいい高校や大学に行けないから」のほか、「お母さんに言われたから」「お父さんに言われたから」の比率が女子に比べて高く、学歴への志向や保護者のすすめにより受験をする傾向があるといえよう。

私立中学校第一志望者も、同様に、公立中高一貫校志望者に比べ、進学実績や保護者などからの勧めを理由にあげている。学習塾の先生からの勧めの比率も高い(図6-4~5)。

2) 保護者の教育観(希望進学先別・性別)

私立中学校第一志望者は、「今の学区の公立中学校は不安なことが多い」が85.8%、「多少無理をしても子どもの教育にはお金をかけたい」「わが子には受験競争を勝ち抜いてほしい」が9割前後と、公立中学校への不安などを理由に、受験競争や一流大学への進学を強く志向していることがうかがえる。

また性別にみると、男子に対する学歴や男らしさへの期待は、女子に比べて依然高いといえよう(表6-1、図6-6)。

保護者 表6-1 教育に関する意見や考え(希望進学先別) (%)

	公立中学校 進学予定 (1,278)		公立中高一貫校 第一志望 (47)		私立中学校 第一志望 (119)
(社会・子どもについて)					
今の日本は実力より学歴を重んじる社会だ	68.4	<	76.6	>	67.2
今の子どもたちは自分の子ども時代よりも幸せだ	38.7		38.3	>	30.3
(教育について)					
どんな地域でも同じ教育が受けられるようにすべきだ	89.5		87.2	>	78.2
今の学区の公立中学校は不安なことが多い	47.2	<<	74.5	<<	85.8
男は男らしく、女は女らしく教育すべきだ	40.7	>>	25.5	<<	43.7
(受験競争・競争意識について)					
受験競争は今後ますます厳しくなるだろう	73.0	<<	91.5	>	85.7
わが子には受験競争を勝ち抜いてほしい	65.1	<	72.3	<<	87.4
多少無理をしても子どもの教育にはお金をかけたい	60.2	<	65.9	<<	91.6
競争によって格差が生まれるのは仕方ない	59.0		63.9	<	71.4
親がしっかりしていないと子どもは受験競争に勝てない	45.1	<<	61.7	<	69.0
子どもを一流大学に入れたい	34.9	<<	55.3	<<	65.5

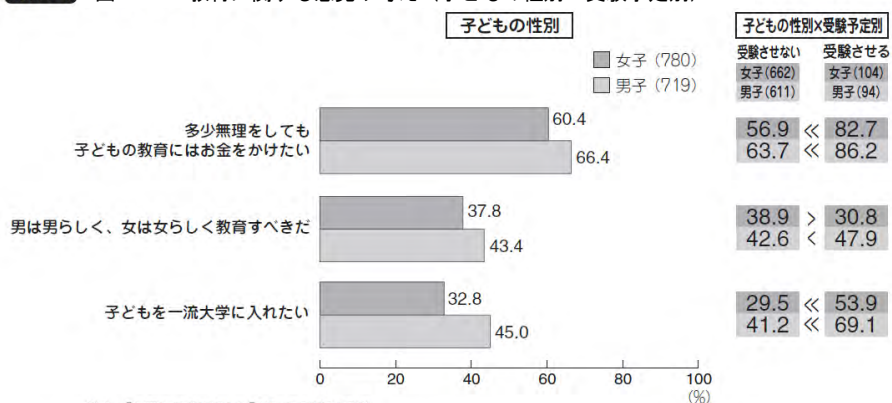
注1 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2 16項目中、私立中学校第一志望者と公立中高一貫校第一志望者で5ポイント以上差があった11項目を示している。

注3 <<>>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。

注4 ()内はサンプル数。

保護者 図6-6 教育に関する意見や考え(子どもの性別・受験予定別)



注1 「とてもそう思う」+「まあそう思う」の%。

注2 子どもの性別で5ポイント以上差があった3項目を示している。

注3 <<>>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差があるもの。

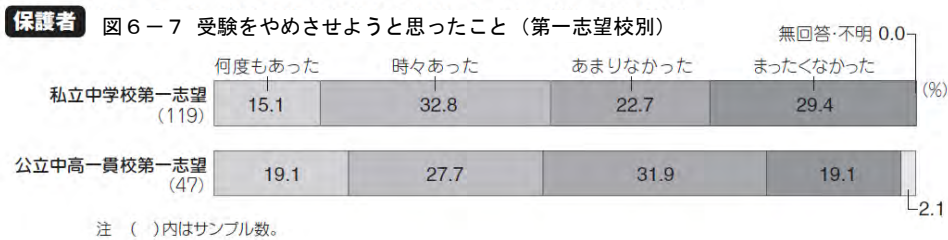
注4 ()内はサンプル数。

(3) 保護者と子どもの葛藤

1) 保護者が受験をやめさせようと思ったこと

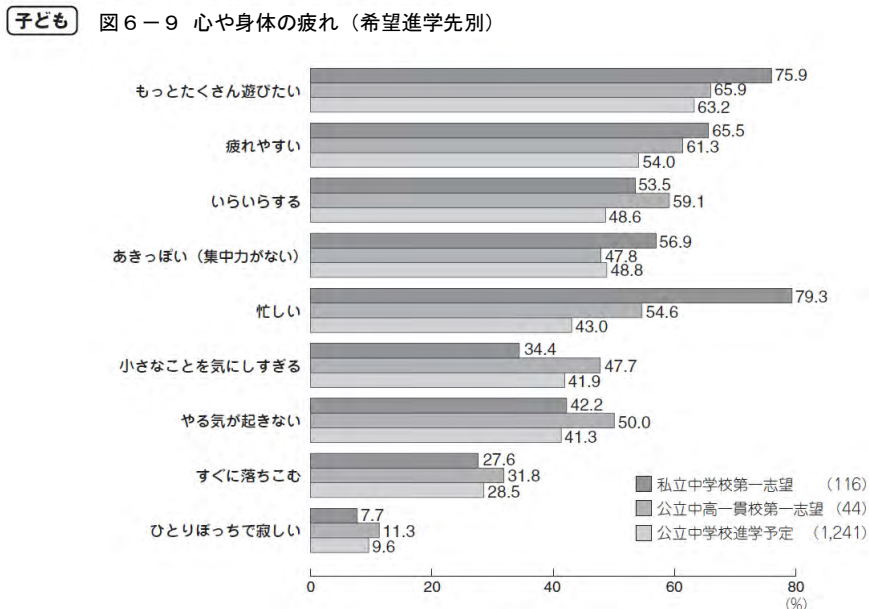
私立中学校第一志望の保護者も、公立中高一貫校第一志望の保護者も、受験をやめさせようと思ったことが「あった」（「何度もあった」＋「時々あった」）と回答している比率が約半数にのぼり、迷いながら受験を行っている（図6-7）。

男子の保護者も同様に、受験をやめさせようと思ったことが「あった」が約半数であり、女子に比べ、迷いながら受験をさせているといえよう（図6-8）。



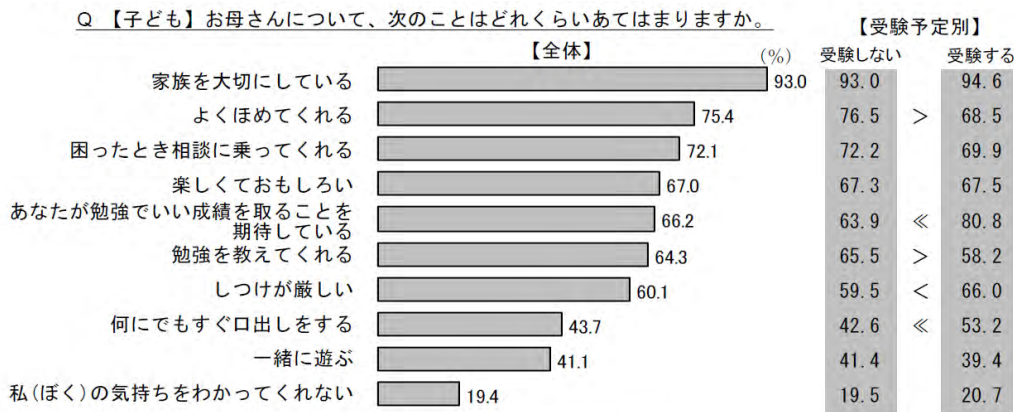
2) 子どもの心身の疲れと保護者からのプレッシャー

私立中学校第一志望者は7割以上が「忙しい」「もっとたくさん遊びたい」と回答しているのに対し、公立中高一貫校第一志望者も、約6割が「いらいらする」、約半数が「やる気が起きない」「小さなことを気にしすぎる」と回答している。受験する子どもは、受験しない子どもに比べて、心や身体の疲れやストレス、多忙感などを強く感じているといえよう（図6-9）。



また、受験しない子どもは、母親について「よくほめてくれる」など、子どもに寄り添う親のイメージを強く持っているのに対し、受験する子どもは、「勉強でいい成績を取ることを期待している」「何にでもすぐ口出しをする」とプレッシャーを感じている（図6-10）。

図6-10 子どもからみた母親（全体・受験予定別）



注1：数値は、「あてはまる」と「わりとあてはまる」の合計。
 注2：<>は10ポイント以上、<>は5ポイント以上差がある項目を示す。

中学校進学段階での学校選択には、主体的に自分の進路を決定するという意味もあるであろうが、選択機会の差や、子どもの心身への負担など検討すべき課題は多い。過度な競争が加速するなか、教師には、これらの構造をとらえ、共同的な学びにむけて子どもと向き合うことが求められるといえよう。

[資料]

- (1) Benesse 教育研究開発センター「中学校選択に関する調査」速報版、2008年6月
- (2) 同上『中学校選択に関する調査 報告書』（研究所報 VOL.48）、2008年9月
- (3) 同上『第4回学習指導基本調査 報告書—小学校・中学校を対象に—』（研究所報 VOL.46）、2008年3月
 (http://benesse.jp/berd「調査・研究データ」に掲載。(2)は10月23日以降に掲載。)

5は子安が担当、1～4、6は橋本が担当した。